

仮面を着けない芸

鈴鹿 千代乃

「仮面を着けてはならない」という鉄則を持つ芸能がある。

それは、「筑紫舞」という神事芸能で、クグツと呼ばれた芸能者達によつて伝えられてきたものである。彼等は、人形を使う「傀儡子・傀儡師」と、自分達を区別するために、あえて、平仮名または片仮名で「クグツ」と表記していた。

この舞は、「筑紫舞」の名乗りから、九州（の北半分・狭義の「筑紫」）を発祥とする芸能と考えられる。

長い間に、筑紫から全国に広まり、近世には、北海道・東北地方を除く日本のほぼ全域に伝播していたと考えられる。

筑紫舞を伝えたクグツ達のその芸に關しての決まりは、次ぎの二条である。

- (一)、神社の境内以外の地で舞つてはならない。
- (二)、仮面をつけてはならない。化粧をしてはならない。

(一)に關しては、次ぎのように伝えている。神社の祭礼において、彼らは、集まった人々に舞を披露し、また神前でも舞う。その御礼

に神社から神札おふだをもらい、それを売り歩いて生活していた。街道や宿駅などで投げ銭をもらう大道芸の徒のする伎をしてはならないと厳しく禁いしめていた。

彼らは、芸能者であつたが、同時に、「渡り神主わたがみぬし・遊あそび巫女みこ」、いわゆるさすらいの信仰宣布者という一面も持つていたと考えられる。

(二)、の仮面や化粧を禁ずる一条は、この芸の本質と、仮面や化粧の意義を考えるうえで重要な一条である。

筑紫舞には、「雲居十年、ふき三年、翁は生涯」という言葉がある。それぞれ、舞の名称で、それを伝承する年月を言ったものと考えられる。いずれも筑紫舞の奥儀ともいふ舞である。その中でも「翁」は、生涯をかけて伝えなければならぬとされる舞である。

「翁」には、一人立ひとりたちからはじまり、三人立、五人立、七人立と、多人数の「翁」が出て舞うものまである。

そのいずれの「翁」にも、翁面を着けてはならないとしている。その理由として、次のように説明している。

面を着けてしまうと、人々の穢れを身に受けられない。翁だけでなく、この舞はすべて素面で舞つて人々の穢れを自らに受け

るのである。

人工的なものも一切身に着けて舞ってはならない。

だから化粧もしてはならない。

手草てくさにとるものは、神社の境内にある榊・笹・木の実など、自然のものでなければならぬ。

彼等は、神社の境内において、そこに集まる人々の穢れを素面という無防備な状態で、自らに受けとめるために舞ったのである。神社とは、人々の穢れを吸収する聖域である。

筑紫舞には、跳躍や旋回といった所作がふんだんに盛り込まれ、そのひとつひとつに人々の穢れを自らに受けるという意味が付けられている。そこには、全身で、穢れを祓う（自らに受け）という、この芸の本質が見てとれるのである。また、次のような伝承もある。

昔、高位高官の前で舞うと、一族の者が一年食べられる程の報酬をもらえた。

この伝承は、面と素面の意義を考える上で重要である。

筑紫舞を伝えたクグツ達は、昔、筑紫の高位高官の前で舞わされていたこともあったであろう。筑紫の高位高官の居る所といえ、まず大宰府などが考えられる。

大宰府は、外国使節をもてなす役所でもあった。彼らは外国使節の前で舞わされた。その時、彼らは素面で臨んだ。表面は華やかに舞いつつ、外国からもたらされる目にみえない穢れに立ち向かわされたのである。この報酬は、莫大であった。それは、彼らが目に見えない穢れを素面で祓ったことへの報酬であったと考えられる。莫大な報酬は、命がけで穢れに立ち向かった、いわば「命料」ともいふべきものであった。

筑紫舞という神事芸能を伝えたクグツ達は、面を着けないという鉄則をかたくなに守って祓えの芸を伝えて来たのであった。

この、筑紫舞の「面」「化粧」などの伝承から、逆に、「面」や「化粧」の意味が見えてくる。

「面を着ける」ということ、あるいは「化粧をする」ということは、そのことで、演者は、「神になる」とか「人格を転換する」と理解されている。

しかし、筑紫舞のクグツ達のとらえた「面」や「化粧」は、それ以前にもっと本質的な意味があった。すなわち、穢れからの「防御」の意味を持つ。

芸能の本質は「穢れを祓う」ということである。人々の穢れを、身に受けることが、芸能の本質である。

穢れを完全に身に受けるためには、自らを防御してはならない。

防御の具である面や化粧をほどこしてはならないのである。この精神で、彼等は、「素面」で穢れに立ち向かったのである。

先日、ある能の宗家が、「面を着けないと不安である」と言われた。この発言は重要である。面を着けることで守られているという意識があると思った。

「顔」は人間の体を代表する部分である。穢れは、顔に集中する。だからこそ、その顔を穢れから防御するために面で覆うのである。

そして、穢れの付着した恐るべき面だからこそ、面箱に密閉され、神社の御神体にもなるし、芸の終了後、割られたりしたのである。

面の持つ神聖性は、穢れを吸収している存在だからなのである。

【付記】

クグツの伝承は、筑紫舞の伝承者であった西村光寿齋氏（本名河西光子氏。故人）から、私が三十年にわたって聞いた採訪録による。

また、その伝承の経緯については、拙著「神道民俗芸能の源流」（国書刊行会刊）他で報告した。